『日本資本主義の父』渋沢栄一の『論語と算盤』を学ぶ

～人としてどう生きるのか、「論語＝道徳」と「算盤＝経済」を、一致させる『人生繁栄の道』～

税理士法人TACT高井法博会計事務所
TACTグループ関連十三社 代表
会長　税理士　髙井法博

２０２４（令和５）年度に紙幣の肖像画が刷新される。新１万円札の顔に決まった渋沢栄一は「日本資本主義の父」とも言われ、日本経済の土台をつくった経済人である。そんなことから、私が創業以来ライフワークとして43年間続けている４泊５日の「髙井法博の経営計画実施作成セミナー」の中でも、時々取りあげてきた。そのため、兼ねてから渋沢栄一に関する書物を集めたり、関連する新聞記事を切り抜いたり、講演会等にも参加してきた。そこで今回、１万円札に描かれることになったことから、学んだ一端を紹介させていただくことにした。

一、ピーター・ドラッカーが渋沢栄一から学ぼうとしたこと。

ドラッカーといえば、経営学の権威として全世界の多くの一流経営者が学び続けている、知の巨人である。氏の代表作の一つである「マネージメント」の日本語版序文に、次のような一節がある。「率直に言って私は、経営の『社会的責任』について論じた歴史上の人物の中で、明治を築いた偉大な人物の一人である渋沢栄一の右に出る者を知らない。彼は世界の誰よりも早く、経営の本質は『責任』に他ならないということを見抜いていたのである」。アメリカの一部の企業で問題になっている「自分の在任中だけは好業績をあげて株価も上昇すればよい」といった短期的視野の経営を続けることで、企業は一時的に繁栄し、その経営者は高額な報酬や退職金を手にするが、そのツケが後任にきて、会社は衰退してしまう。また、日本でも一時的に好業績をあげた企業が、マスコミで「高収益企業」「時代の寵児」と持てはやされながら、「慢心」や経営者自身の「考え方・人格を高める」努力、「自利とは利他を言う」との、「人間として正しい判断基準」を勉強することを怠ることで問題山積となり、いつしか消えて行った例は多い。このことから「社会や組織、そして人の末永い繁栄はいかに達成されるのか」「いかに安定した社会秩序を築き、人や組織の永続的な繁栄を保つかにかかわる原理原則」こそ、ドラッカーが渋沢栄一から学んだ核心部分であったと思う。そして渋沢栄一はこのような数々の原理原則を、孔子の論語の中から学んだのである。

二、渋沢栄一とは

渋沢栄一は１８４０（天保11）年武蔵国榛沢郡（現・埼玉県深谷市）に生まれた。幼少から家業の農業、養蚕、藍玉の製造・販売を手伝っており、父の代には名字帯刀が許される豪農であった。また幼少から論語をはじめとする学問に勤しみ、20代で倒幕思想を抱き、高崎城乗っとりを計画したが、いとこの京都での見聞と忠告からこの計画は中止した。その後、京都へ向かい、一橋（徳川）慶喜に仕官し、幕臣となった。27才の時、慶喜の弟、徳川昭武に随行してパリ万国博覧会を見学し、その後欧州諸国の実情を見聞。明治維新直後の大蔵省（現・財務省）の一員として、新しい日本の国造りに深く関わるも、33才で大蔵省を辞し、民間経済人として活動した。スタートは「第一国立銀行（現・みずほ銀行）総監役（頭取）となり、以後は第一国立銀行だけでなく、多くの地方銀行設立を指導した。岐阜においても第十六国立銀行（現・十六銀行）が、創業にあたり銀行業のノウハウについて渋沢から学んだ。大正期に十六銀行が経営危機に陥った際は、渡辺甚吉初代頭取が渋沢に会い、支援・助言を受け難局を乗り越えたという。十六銀行本店には、渋沢から贈られた額入りの書『順理則裕』（道理に従って生きることは、すなわち繁栄に繁がる）という、中国宗代の朱子学者「程頤」の言葉が掲げられている。この他にも岐阜の中津川市の中央製紙（現・王子エフテックス中津工場）の設立や経営に関わり、中津川の製紙産業の発展に貢献している。さらに銀行のほか、東京瓦斯、東京海上火災保険（現・東京海上日動火災保険）、王子製紙、日本製紙、東京急行電鉄、太平洋セメント、帝国ホテル、大日本製糖、日本郵船、キリンビール、サッポロビール、東洋紡など多種多様の企業の設立に関わり、その数は５００以上といわれている。また、日本赤十字社、聖路加国際病院、東京証券取引所、商法講習所（現・一橋大学）、大倉商業学校（現・東京経済大学）、東京商法会議所（現・東京商工会議所）等の社会公共事業にも携わったが、同じ時代の実業家である、岩崎弥太郎や三井高福らとは違い、財閥はつくらず惜しまれながら１９３１（昭和６）年、享年92才で他界した。

三、渋沢栄一の「論語と算盤」

『論語と算盤』は１９１６（大正５）年に発行された。本書は渋沢栄一が書いた訳ではなく、講演会等の口述をまとめたものである。渋沢栄一を慕う人々が竜門社という組織を作り、「竜門雑誌」という機関紙を発刊し、渋沢の講演の口述筆記を次々と掲載していった。その中から、編集者の梶山彬が90項目を選んでテーマ別に編集したのが本書である。この内容は後世、「日本資本主義の父」「実業界の父」と呼ばれ、ノーベル平和賞の候補にもなっている。日本の実業界ひいては資本主義の制度を設計した人物が、生涯を通じて貫いた経営哲学『利潤と道徳』。「論語＝道徳」と「算盤＝経済」を一致させる、『道徳経済合一説』という理念を打ち出したもので、幼少期に学んだ孔子の『論語』を拠り所に**倫理と利益の両立を掲げ、経済を発展させ、利益を独占するのではなく、国全体を豊かにするために、富は全体で共有するものとして社会に還元する**ことを説いた。『論語と算盤』には、その理念が端的に次のように述べられている。『富をなす根源は何かと言えば、**仁義道徳。正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することができぬ**』。そして『**道徳と離れた欺瞞、不道徳、権謀術数的な商才は、真の商才ではない**』。また、『**事柄に対し如何にせば道理にかなうかをまず考え、しかしてその道理にかなったやり方をすれば国家社会の利益となるかを考え、さらにかくすれば自己のためにもなるかと考える。そう考えてみたとき、もしそれが自己のためにはならぬが、道理にもかかない、国家社会をも利益するということなら、余は断然自己を捨てて、道理のあるところに従うつもりである**』。との言葉はまさに渋沢栄一の生き様や『経営哲学』の真髄が込められている。このことは、二宮尊徳の『道徳なき経済は犯罪、経済なき道徳は寝言』、京セラ稲盛和夫名誉会長の『京セラフィロソフィーとアメーバ経営』、幕末備中松山藩の藩政改革にあたった陽明学者山田方谷の『理財論』やその弟子の三島中洲『義利合一論（義＝倫理、利＝利益）』と同意義である。事業を行っていくうえで利は不可欠であり、これがなければ事業の存続はない。またこれは人間活動の励みにもなる。誰しも儲けたいという「欲」がある。しかし、その欲を利己の範囲にのみ留まらせてはいけない。あの日産自動車を立て直したカリスマ経営者、カルロス・ゴーン被告の大変な実力と努力の末に築き上げた地位や名声、功績も論語＝道徳的考えを自分のものにしていなかったために、残された一回しかない人生の最終章をけなす結果としてしまった。江戸中期の思想家、石田梅岩が『利を求むるに道あり』と述べたように、利潤追求は決して悪くはない。ただし『義』にかなったものでなくはならないと、倫理観の大切さを説いている。我々は渋沢栄一の教え『経営者の社会的責任』を肝に銘じ、一度しかない人生を社員、お客様、会社、社会の健全な発展のために、仕事を通して貢献する、「**誤りなき生き方**」をしなければいけないと強く思った。

会社の登記
相続手続
不動産の名義変更
成年後見
土地建物の測量登記
その他、お困りごとがございましたら、お気軽にお電話ください。

島田司法書士土地家屋調査士合同事務所
（簡裁訴訟代理認定）
司法書士　島田　遵
行政書士
土地家屋調査士　島田憲治
〒502-0916
岐阜市西中島一丁目4番6号
TEL（058）232-0011　FAX（058）295-3805